

白バラ通信

No.20

この度の「東北地方太平洋沖大地震」、報道の映像を見る度、災害のひどさに言葉を失います。自然の力の巨大さを思い知らされますが、同時に危機管理の在り方や原発政策にも考えさせられるところがありました。被災された方々にお見舞い申しますとともに1日も早い復旧を念じます。(編集担当)

講演会のご案内

「程瑞芳日記—私の見た南京大虐殺—」

松岡環氏（南京大虐殺60カ年全国連絡会）

5月26日（木）pm6:00～

神戸大学 国際文化学部 B101教室

（共催：神戸大学教職員九条の会、灘区9条の会）

【報告者から】

程瑞芳日記と加害・被害の証言から金陵女子大での日本軍の暴行を検証する

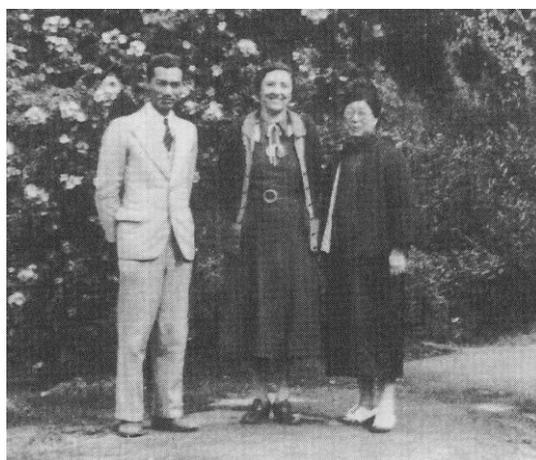
南京大虐殺60カ年全国連絡会 松岡環

一、はじめに

私が、『程瑞芳日記』と言う言葉に出会ったのは、2004年のことでした。南京大虐殺調査研究基金の選考論文に、新たに見出された南京大虐殺当時書かれた日記の研究が発表されると知りました。『程瑞芳日記』は、1937年当時の南京の惨状を克明に書いた日記で、南京大虐殺と性暴力を目の当たりにした程瑞芳が、毎日日記を書き綴り、ヴォートリンと共に金陵女子大学（1937年当時は金陵女子文理学院）と中国人女性たちを守った人でした。

程瑞芳日記の日本語訳は、在日華僑の友人たちが献身的に訳してくれました。私は出来上がったばかりの『程瑞芳日記』日本語訳を読み始めて、私の脳裏には、聞き取りをした南京の女性たちの顔が浮かんできました。南京での被害調査の過程で性暴力被害をカムアウトされたお婆さんたち、女子大に命からがら逃げ込んで日本兵の靴音に身を潜めていたと証言してくれたお婆さんたちでした。

南京大虐殺は、南京レイプとも言われ、南京城内や南京近郊に住む計り知れない数（東京裁判では約二万人）の女性が被害にあっていました。「慰安婦」問題研究者の蘇智良教授は、その数は約七万



（中央がヴォートリン、右端が程瑞芳）

人と言われていました。南京の女性たちが陵辱され殺され事実を聞き取り、調査をしてきた私は日記の出現によって被害の事実を再確認できました。

二、『程瑞芳日記』と加害と被害の証言や日記を読んで（12月11日～12月16日）

南京城内の国際安全区は、日本軍が認めようとせず、中国人の生命の安全が保証されなかった事実が『程瑞芳日記』より証明されます。そればかりか、ヴォートリンが命をかけて金陵女子大に避難していた女性たちを守ろうとしたにもかかわらず、日本兵の強姦が絶え間なかった事実も証明されます。南京に残った外国人たちは、一般市民（老百姓）の命を救おうと危険を顧みず、精一杯人道的な行動を続けました。南京に雪崩れ込んだ日本軍将兵は、奪い、焼き、殺す、強姦する行動に出ました。否定派や右翼ジャーナリストがいくら「南京大虐殺はナイ！」と叫んでみても、南京大虐殺と南京レイプは、存在することが明らかです。『程瑞芳日記』と私が調査した250名の加害兵士の証言と日記、当時南京金陵女子大学や難民避難所に身を寄せていた中国人達と性暴力被害を受けた女性達の証言が、場所や時間被害内容まで一致しています。これらの資料から、当時の国際安全区は全く安全でなかった事実が具体的に浮かび上がります。加害被害の調査は、日本国内や南京近郊を含め全てを一軒いっけん探し出して聞き取りをしました。

三、見えて来た内容

- 1) 国際安全区は安全ではなかったこと
- 2) 性暴力と市民の虐殺をどこでも、いつでも
 不断に再生産している日本軍の実態
- 3) 女性ばかりの難民区金陵女子大でも性暴力
 が頻繁に起きていたこと。
- 4) 安全区での一般市民の引き出しと集団虐殺が
 公然と行われていたこと。

1)～4)の項目はパワーポイントを使って具体的に説明しましょう。



(当時の姿を残す南京師範大学図書館)

四、まとめとして（略）

以上、この三つの部分（日記、加害者、被害者の証言など）は、証拠としての相互の補完作用をもたらすと同時に、元日本兵士や被害を受けた中国人女性達のそれぞれの証言が、関連しあい、当時の真実を証明し、その証言の信憑性と、証言としての歴史的価値を高めています。

日本軍が起こした戦場での性暴力は「軍紀の弛緩」と言う理由や、軍隊内に於ける兵士達の、不平、不満、フラストレーションの発散、解消の手段としての性暴力」というのが主要因ではありません。一番大きな理由は何なのか？講演の中で話す私の実践の報告から、皆さんは、一緒に考えてください。

《参考》 南京大虐殺を知っていますか？

1. 概要

5W1H風に書きますと、下記の様になると思います。

Who: 上海派遣軍(司令官朝香宮鳩彦王 中将)・第10軍(司令官柳川平助中将、杭州湾上陸)の2軍団からなる中支那方面軍(司令官松井石根大将)の日本軍。

What: 占領当日から翌日にかけての南京城内外における掃蕩戦では、戦意を失った多数の中国兵を掃射によって虐殺し、また以後1週間ばかりの間に、捕虜や民間人の間に身を潜めていた敗残兵の大部分が集団虐殺された。戦死者を含めて中国軍の犠牲者は10万を下らなかったと云われる。これら将兵のほか、掃蕩戦で犠牲になった市民や城外からの避難民、また敗残兵狩りの巻き添えで殺された市民も少ない数ではなかった。城内家屋の被害は、軍事行動によるもの1.8%、放火13%（主要実業街は平均32.6%）、略奪63%に及び、中国人は南京に処女1人もなしと称したという。

When：1937年(昭和12年)、日中戦争(支那事変)初期の約6週間から2ヶ月にわたる。

Where：南京城内外

Why(How)：軍隊教育で中国人蔑視観を植え付けられていたこと。過酷な急進撃を強いられたこと。南京事件以前にも、日本軍は移動中に上海、蘇州、無錫、嘉興、杭州、紹興、常州のような場所でも捕虜や市民への暴行・殺傷・略奪を続けていたとされ、その様な集団虐殺の大惨劇を目撃した事によって、一部の日本軍将兵は凶猛化し、一般市民に対して虐殺・強姦(ごうかん)・略奪・放火と蛮行の限りを尽くし、この蛮行は数週間にわたって繰り返された。

この事件を欧米ではナンキン・アトロシティーズ Nanking atrocities と呼ぶ。日本でも1970年ごろから南京大残虐事件、南京大虐殺とよばれるようになった。また、南京大虐殺はあった、なかったなどの大論争も起こっている。(Wikipedia "南京事件 1937年" を参考にした)

2. 南京虐殺本訴訟：生存者への賠償確定した

1937年の南京虐殺に関する書籍で「偽の被害者」と指摘されたとして、生存者の夏淑琴さん(79)が、著者の東中野修道・亜細亜大教授と出版元の展転社(東京都)に賠償などを求めた訴訟で、最高裁第1小法廷(涌井紀夫裁判長)は5日、著者と同社の上告を棄却する決定を出した。計400万円の支払いを命じた1、2審判決が確定した。(毎日新聞 2009年2月6日 東京朝刊)

(風土記エッセイ) 虹と史跡の奥琵琶湖マキノの里にて

尼川大作 (神戸大OB)

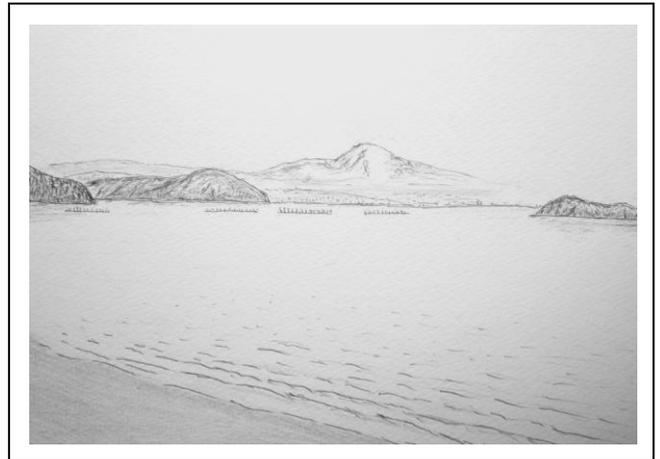
雪に埋まる奥琵琶湖

滋賀県奥琵琶湖の冬は厳しい。今年のNHK大河ドラマ「江(ごう)～戦国の姫たち～」の舞台となった長浜市「浅井の里」はおびただしい雪に埋まるところ。その西隣、高島市マキノの里は、六甲山を思わせるような野坂山地が背後に控え、竹生島を浮かべ緑水をたたえる湖からは、白砂青松の浜で仕切られている。この浜辺(高木浜)に神戸から移り住んでほぼ1年になる。「滋賀県のチベット」と地元の人と言うこのマキノあたりから関ヶ原までの一帯は豪雪地帯である。雪掻きも多ければ日に3回、深いときは裏庭にまわるのにもカンジキを履く。あたりは風も強烈。JR湖西線をしばしば運休させるのもこの風と雪だ。イグアス大滝の音にも勝る轟音の北風は抑揚があり威圧的。「去れー! されー!」とばかりに吹く。しかしときには静かになり沈黙の世界が交代する。

降る雪はさまざまな形と質がある。空から不思議な飛跡で降りてくる綿雪にボタ雪、粉雪や霰(アラレ)。晴ればダイヤモンドの碎片があちこちに飛び散って輝くような雪原。ぼんやり見入っていると気持ちが浄化されるようだ。一夜で生じた積雪40センチの白銀の世界を、ストーブに薪をくべながら眺める楽しさもある。

冬を生き抜く動物たちの様子も面白い。雑木林に行けば、点々として続く狐、ウサギ、鹿の足跡が交差し躍る。カラスとトンビ、ライバル同士の寸劇に腹を抱えて笑うこともしばしば。初冬まで活躍したニホンミツバチたちは、雪に埋もれた巣箱にこもって静かだが、少し暖かい日には、百匹ほどが運動不足を補うかのように巣箱付近を飛び回り、また死んだ仲間やゴミをせっせと運び出して、しっかりと生存を証明してくれる。

そしてごくたまにはあるが、突如天空に現れる巨大な虹のかけ橋が目を奪うことも。一方、琵琶



湖上はるか遠くにあるはずの島々が浮き上がって、ぐっと近くに見えるミラージュ（蜃気楼）現象に出くわすこともある。

歴史の宿る奥琵琶湖周辺

大震災の直後、神戸から気晴らしに遊びに来て知ったマキノであったが、この付近は歴史と自然が交差し魅力あふれるところだ。古い石組みが残り、かつて若狭—京都を結んだ海津の湊は今や小さな船溜まりだが、古い蔵と遊郭の跡は宿場町の一時の繁栄を偲ばせる。『街道を行く』の“湖西のみち”で司馬遼太郎が渡来人や佐々木源氏のことなどを書きとめているように、高島市付近には古代から中世での歴史が詰まっている。藤原仲麻呂が討たれた（764年）のもこの地（安曇川）と聞く。近江高島に遺構をとどめる大溝城は、江の妹（初）が京極高次と暮らした所。マキノの東には賤ヶ岳古戦場、



その南に浅井氏の小谷城跡、さらに秀吉の長浜城跡、伊吹山の近くには京極氏の上平寺城跡と、奥琵琶湖は史跡の枚挙に事欠かない。我が尼川家には、戦国時代末期のことらしいが、毛利の討手を逃れ、武士を捨て名字を変え石見（島根県）の秘境に隠れ住んだという落人伝承がある。現代に至る何百年かをその隠れ里に棲んだとか。それへの感傷を興させるなにかがあるのかも。やはり私には大都会よりも隠れ里の方が性分に合うのかもしれない。幼少のころ過ごした岡山県の山奥や宮崎県門川の田舎を思わせる山河がマキノにもある。寒ブナでも隠れていそうな小川に見入っていると、約半世紀前の小学生時代にタイムスリップすることも。

揺れる自然らしさ

しかし、この美しい自然の地もいろいろ問題が。マキノの海津大崎は「日本桜名所 100 選」に入る所だが、天狗巢病が広がってきて深刻な問題に。地元では「桜守の会」が保護に取り組んでいる。ドラマのロケにも使われる魚寄せの松林もマツクイムシの被害が出ている。マキノでも昨秋はツキノワグマの出没情報が頻繁だった。カシノナガキクイムシなどによるナラ類樹木（ドングリの実をつける）の枯渇が一因とされている。その害虫のメスは背中に円状の代紋のようなものを付けている。円の窪みの中で菌（キノコ）を飼っており、その培養菌を木の内部で増殖させ、自らの幼虫に食べさせるといった珍しい仕掛け。集合フェロモンも一役かっており、虫のどれかがいったん木の材部に侵入できた際には、「それ行けどんどん」とばかりに大勢で集合するやっかい者だ。最近、森林総合研究所（つくば市）はこのフェロモンの同定・合成に成功したと発表した。熊のためにも害虫駆除への応用を期待したい。

自然に浸ってせつかく安らかになったところを突如打ち破る不快な音と地響きは、自衛隊饗庭野演習場での大砲発射訓練によるもの。日米共同訓練とかでこの3月には170人の米兵も入ったとか。全くうっとうしい気分になる。その一方、この地にも「9条の会」のポスターが貼られ、その講演会を知らせる町内放送（防災無線を使っての日常の広報）の案内もあり、ちょっとほっとしたこともあった。（カットも筆者；上から、「伊吹山（中央）と竹生島（右）」、「海津の古い蔵」、「海津 石積みの浜」）

